2021年度 第21回
高校生エッセー・コンテスト

逆境を光につないだ神谷美恵子の言葉から

「生きがい」とは？

Anthology
作品集

津田塾大学
TSUDA UNIVERSITY

津田塾大学は、津田梅子の「女子英学塾」創設から120年にわたり、「変革を担う」女性たちを輩出してきました。精神科医として、ハンセン病の逆境にある人たちに寄り添い続けた神谷美恵子（1914–1979）もその一人です。著書『生きがいについて』（みすず書房）は、出版から半世紀以上たった今も人々の心をとらえ続け、コロナ禍で再びその意義が見直されています。

今回のエッセー・コンテストでは、神谷美恵子が残した言葉を手がかりに、高校生のみなさんに「生きがい」について考えたことをエッセーという形で書いていただきます。

Index

募集要項（裏面）…… 3
入賞作品…… 4
講評 …… 5
優秀賞作品…… 6
募集要項（表面）…… 11
応募者在学校一覧 …… 12
メッセージ …… 14
第1回受賞者・第2回受賞者
神谷美恵子展から得たもの …… 15

Illustration: otama

逆境を光につないだ
神谷美恵子の言葉から

2021年度 第21回
高校生エッセー・コンテスト

「生きがい」とは？

神谷美恵子は津田英学塾（現津田塾大学）で英文学を専攻しましたが、卒業後まもなく肺結核にかかり、孤独な療養生活を通して人生への思索を深めました。

「当時は結核のいい療法もなかったので、同時代に療養していた知人のなかには、いくたりも若くして逝いたひとがあった。その後私はふしぎにも完全に治ったが、いったいなぜ私だけが癒されて、あのひとたちは死んで行ったのであろうか、という思いが負い目のようになって、いつまでも心につきまとった。大体以上のようなことから、病や苦しみ、死や生の問題は早くから私をとらえてはなさなかった、といえる。

らい（原文ママ：ハンセン病）の存在をはじめて知ったのは、津田英学塾二年生のときであった。キリスト教の伝道者であった叔父にさそわれて東京都の多磨全生園をおとずれ、この病気の患者さんたちに初めて接して大きなショックをうけた。私もできれば看護婦か医師になってこのひとたちのために働きたい、という思いが心に芽ばえたのもこの時である。しかし、周囲の大反対と自らの病気のため、この願いはなかなか実現されなかった。」

（『生きがいについて』より）

精神科医として歩み始めたのは30歳になってからのことでした。2人の子どもを育てながら、当時、差別や偏見の対象であったハンセン病の人たちに寄り添い、多くの翻訳や著作を世に送った神谷美恵子は、まさに「生きがい」をたえず自らに問いながら歩み続けた、変革を担う女性であったと言えるでしょう。

神谷美恵子が全霊をこめたエッセー『生きがいについて』の冒頭には、こう記されています。

「平穏無事なくらしにめぐまれている者にとっては思い浮かべることさえむつかしいかも知れないが、世のなかには、毎朝目がさめるとその目ざめるということがおそろしくてたまらないひとがあちこちにいる。ああ今日もまた一日を生きて行かなければならないのだという考えに打ちのめされ、起き出す力も出て来ないひとたちである。耐えがたい苦しみや悲しみ、身の切られるような孤独とさびしさ、はてしもない虚無と倦怠。そうしたもののなかで、どうして生きて行かなければならないのだろうか、なんのために、と彼らはいくたびも自問せずにいられない。たとえば治りにくい病気にかかっているひと、最愛の者をうしなったひと、自分のすべてを賭けた仕事や理想に挫折したひと、罪を犯した自分をもてあましているひと、ひとり人生の裏通りを歩いているようなひとなど。

いったい私たちの毎日の生活を生きるかいあるように感じさせているものは何であろうか。ひとたび生きがいをうしなったら、どんなふうにしてまた新しい生きがいを見いだすのだろうか。」

神谷美恵子は、「耐えがたい苦しみや悲しみ、身の切られるような孤独とさびしさ、はてしもない虚無と倦怠」というような、いわば逆境の中から、「生きがい」という言葉を見つめなおしています。これは、「病めるひとたちの問題は人間みんなの問題」だと考え、「このひとたちひとりひとりとともに、たえずあらたに光を求めつづける」一貫した姿勢によるものでしょう。逆境から光への道しるべが、そこから見えてきます。

精神医学の英語論文では、神谷は究極の逆境を“limit-situation”（限界状況）という専門的な視点から考察しています。

Among various situations that may confront human beings during the courses of their lives, there are certain extreme adversities that by their very nature cannot be avoided, manipulated or changed; they stand in front of man like stern walls, deaf to all entreaties or endeavours, so that man's powers of endurance are tried to the limit and usually to no avail.（中略）How does a man, who is placed in such a limit-situation, react to it and in what form does he surmount it, if he ever does? That is a basic question related to his very existence as a man. (“The Existence of a Man Placed in a Limit-situation,”*Confin. psychiat. 6*, 1963.)

今、わたしたちは、世界を不安の渦に巻き込んだ新型コロナウイルス感染症拡大の現実に向き合っています。コロナ禍で世界が大きく変わるなか、地球上の多くの人々が、これまでとは全く違う、厳しい状況下に置かれました。命や健康、経済が脅かされ、人と人とのつながりや、行き来も厳しく制限されました。みなさんのなかには、不自由を我慢したり、孤独におしつぶされそうになったり、また、楽しみにしていた旅や学びの機会、そして夢まで諦めなくてはならない人もいるでしょう。そのようななかで、自分の生き方や考え方、「生きがい」を見つめ直しているかもしれません。

そびえたつ壁のように立ちはだかる困難を、人はどう乗り越え、自身の存在意義を見出せるのでしょうか。自分自身の経験や学びなどをもとに、あなたが考えることを自由に書いてみてください。英語でも日本語でもかまいません。

募集要項および応募方法の詳細については津田塾大学WEBサイトをご覧ください。
https://www.tsuda.ac.jp/aboutus/essay/index.html

入賞作品

応募作品 381編（英語作品175編、日本語作品206編）

今年度はどの作品も甲乙つけ難く、
最優秀賞を決めずに5作品を優秀賞といたしました。（アルファベット順）

優秀賞

賞状 及び 副賞 1 万円

学習院女子高等科（東京都） 1 年
岩上 陽呂佳 さん （日本語）

盈進高等学校（広島県） 2 年
延 泰世 さん （日本語）

渋谷教育学園渋谷高等学校（東京都） 1 年
能勢 あすか さん （英語）

青森県立青森高等学校（青森県） 2 年
鈴木 淳平 さん （日本語）

Lincoln Park High School（Chicago） 3 年
山田 こゆき さん （英語）

第21回 エッセー・コンテスト 審査委員

委員長／ 早川 敦子 （津田塾大学 副学長、ライティングセンター長、英語英文学科教授）
委　員／ 大類 久恵 （津田塾大学 英語英文学科教授、津田梅子資料室長）
委　員／ 大原 悦子 （津田塾大学 ライティングセンター客員教授）

講　評

高校生エッセー・コンテストは、津田塾大学創立100周年を記念して、2000年に始まりました。2020年に創立120周年を迎えた本学ですが、新型コロナウイルス感染拡大の影響で、さまざまの記念企画も見送りとなり、エッセー・コンテストも1年遅れの実施となりました。

21回目のエッセー・コンテストの実施にあたり、これまでの「手紙を書く」形式からテーマに沿った「エッセー」を書く形式にし、応募作品も郵送ではなく、Web上で受け付ける方式に変更しました。この新しい試みに、日本全国そして海外からの応募も合わせて381編（英語作品175編、日本語作品206編）の作品が寄せられました。コロナ禍に負けずに取り組んでくれたことが伝わってくる、力作ぞろいだったことを大変うれしく思います。

今年のテーマは「『生きがい』とは？」でした。津田英学塾（現津田塾大学）の卒業生であり、ハンセン病の人たちに生涯、寄り添い続けた精神科医・神谷美恵子（1914―1979）が残した言葉をヒントに、高校生のみなさんに「生きがい」について考えてもらいました。

多くの翻訳や著作を世に送り出した神谷ですが、なかでも著書『生きがいについて』（みすず書房）は、出版から半世紀以上たった今も、読者の心をとらえ続けています。特に、コロナ禍で地球上の多くの人々が、これまでとは全く違う、厳しい状況に置かれるなか、その意義を問いなおされています。読書を通して、一人ひとりが、自身の生きがいを考えるきっかけを与えられたと言えるかもしれません。

「生きがい」という難しいテーマでしたが、高校生たちは果敢に挑んでくれました。コロナ禍で物理的にも、精神的にも、さまざまな制約を受けるなかで、「生きがい」の問題を自身の学びや経験に引き寄せ、懸命に考え、前に進もうとしています。特に最終選考に残った作品からは、どれも「言葉」を通して表現することの真摯さと、しなやかな感性が伝わってきました。それぞれの経験は多様で、表現力もエッセーとして甲乙つけ難く、今年は最優秀賞を決めずに5作品を選考して優秀賞といたしました（以下、アルファベット順）。

岩上さんの作品は、寝たきりの祖父とのやりとりを通して、日常のなかにあるささやかな「生きがい」を、生き生きと、若者らしいやわらかさで表現し、コロナ禍での人間のあたたかさを改めて感じさせる作品でした。

延さんは、子どものころから何度も訪れているハンセン病療養所・長島愛生園での貴重な体験を、自分のなかで咀嚼（そしゃく）し、説得力のある文章で伝えています。神谷美恵子の言葉も丁寧に追い、全体の構成がしっかりと展開を支えています。

アインシュタインの言葉を、冒頭と最後に効果的に引用したのは能勢さんです。男性の友人が涙するような深刻な出来事を、「より良く生きる」ための力に変えたバイタリティーにエールを送りたくなりました。英文の構成も見事です。

鈴木さんは、「生きがい」とは「人々の繋がりの中で自分の存在意義が確立され、達成感や喜び、幸せを感じることだ」と考えました。家庭や地域での「小さな役割」に目を向け、日常を顧みながら真摯に考える姿勢が印象的でした。

山田さんは米国からの応募でした。自らの闘病生活中に出会った人々とのかかわりを通し、神谷の言う「生きがい」の意味を熟考し、力強く英語で表現しています。テーマに沿ったエピソードが、読み手を引き込みました。

コロナ禍の2021年。高校生たちが表現してくれた、さまざまな形の「生きがい」に、審査委員一同、励まされる思いでした。

2021年度高校生エッセー・コンテスト

審査委員長　副学長、ライティングセンター長

早川敦子

優秀賞

学習院女子高等科（東京都）１年
岩上 陽呂佳 さん
Hiroka Iwakami

じいちゃんの笑顔

私の祖父は、糖尿病を患っている。多くの病気を経験したこともあるため脚が弱く、寝たきりの毎日を過ごしている。本人に回復しようとする意志はほとんど見受けられず、テレビを見てタバコを吸っての日々の繰り返しである。そんな祖父の家を数か月ぶりに訪れた私はすぐさま彼のベッドへ向かった。そこには、以前より肉がそげ落ちた無表情な顔と、骨と皮ばかりの手足と、相変わらず横になってテレビに目を向けている姿があった。私はその瞬間、唐突に涙が込み上げてきた。それはまるで死が来るのをただ待っているかのような姿だったからだ。彼の死が近づいていることを実感した私は怖くなって悲しくなって、しばらくの間、胸が締め付けられていた。

それから私は祖父に空元気の挨拶をして、爪切りをしてあげることにした。その時、彼の足裏にある大きなタコが目に入ってきた。私は祖父が若い頃、多くの苦労をしてきたのを知っている。けれど、今の彼の姿から昔のエネルギッシュで根気強い姿を想像することは難しかった。私は自身の中で、少しでも、今からでも彼に活力を与えたいという願いと少しの歯がゆさを感じた。ためらいもあったが

「じいちゃん、どっか行きたいとこ、ないの？」

と聞いてみた。すると

「どこもないよ。」

とあっさり返されてしまった。私はやはりそうなのかと落胆しつつも、その軽々しい声に空虚感というよりもむしろ潔さを感じたことに疑問を抱いた。すると彼はこう続けた。

「じいちゃん嬉しいなぁ。こうやって孫に爪切ってもらって。」

祖父は満面の笑みを浮かべていた。それは今までで最高の笑みだった。彼の温かい目には幸せと力がしっかりと存在していた。こんな生活でも、あんなこと言わなくても彼のすぐそこに幸せや活力はあるということを私は痛感し、またすぐにじいちゃんのもとを訪れないとな、と思った。

「生きがい」というと眩しくて、少し堅苦しい気がしてしまう。私は生きがい、つまり人生の意味や価値とは〇〇とはっきり分からなくても良いのではないかと思う。なぜなら生きがいは一人一人違った主観的なもので、だからこそ一言では表せない複雑で漠然としたものだと思うからだ。私には少しの目標があるが、生きがいと言えるまでのものはない。目まぐるしく社会が変化しているコロナ禍で「自分の生きがいとは」なんて見いだす暇もなく、自分や誰かを守るのに必死になっている人、何かを失って日々の生活が色褪せて見えてしまっている人もいる。はっきりとした生きがいがなくてもみんな毎日それぞれの人生を歩いている。私の祖父もそうかもしれない。

しかし彼のあの笑顔はすぐそばにある幸せをただ楽しく感じているようだった。私は寝たきりの彼から、ささいな喜びや幸せこそがゆっくりと、けれど確実に流れていく限られた人生を飾っていくもので、それを日々見つけることが大切だと教わった。挫折などをしたその時は虚無感に苛まれるかもしれない。けれどだからといってその人の人生の意味や価値が本当になくなったわけではない。そういった経験を、自分が歩んだ過去として振り返った時に輝いていて貴重に思えるようにすること。そして、今をささいなことで楽しむこと。私はこの2つを胸に刻んで将来への希望や活力にしていきたいと思う。

優秀賞

盈進高等学校（広島県）２年
延 泰世 さん
Yasuyo Nobu

愛するということ
～私の生きがい～

岡山の小島にある私の大好きなハンセン病療養所、長島愛生園。私は、社会から断絶された入所者から、どうすれば「共に生きる社会」を創れるかという問いを投げかけられている。

ハンセン病はかつて「らい」と蔑まれ、国の終生絶対隔離政策に基づき、家族や古里から切り離され、名前も、健康も、時には命も奪われた。私は交流を続けながら、差別を生き抜いた入所者の「生の声」を後世に残そうと記録し続けている。

教員である父の影響もあって、私は母のお腹にいる時から長島愛生園に通っている。私の名前の「泰」の字は、入所者の金泰九さんから父がもらって私に付けた。子孫を残すことを禁じられた入所者たちはみな、子どもの私を抱いて愛してくださった。

コロナ禍で入所者との交流ができない時、私は愛生園に佇む「神谷書庫」で読書に耽った。書庫は、かつて愛生園で精神科医として勤務した神谷美恵子先生を顕彰するものだ。先生直筆のメモが残された本もあり、先生の息づかいも感じられる。私はそこで、先生の名著『生きがいについて』と、フロムの『愛するということ』の２冊に出合った。

『生きがいについて』の洞察の主軸ともいえる人物は近藤宏一さん。幼い私を抱いて愛してくださった一人である。彼は、同じ盲目の入所者仲間とハーモニカ楽団「青い鳥」を創設し、絶対隔離政策の時代にあって、ついには有楽町で演奏会を開くほど、その音楽の評価は高かった。

病気の後遺症で指が欠損し、感覚もない入所者たちは点字楽譜が読めなかった。近藤さんは、自ら楽譜を舌読し、口に血をためながら楽団員にドレミを授けた。

「（「青い鳥」の）よろこびが、真の生の充実感から湧きあがっているものであることは、この楽団の練習をこっそりとのぞいてみればわかる。指揮者（近藤さん―筆者）の……烈しく、きびしい指揮のもとに全員が力をふりしぼって創り出す協和音。これほどすばらしい生命の燃焼の光景を私はあまりみたことがない」と神谷先生は、『生きがい』に記している。

近藤さんは言う。「……萎えた手に握りしめる一個の小さなハーモニカを手にして私はいつも慰められている。皆でうみだした悦びと希望が細く優しい音色とともに夕べの窓辺でいつまでも私の心を揺り動かしているのだった」と。

『愛するということ』にこうある。「人を愛するということは、なんの保証もないのに行動を起こすことであり、こちらが愛せばきっと相手の心にも愛が生まれるだろうという希望に全身を委ねることである」と。「青い鳥」はフロムの言葉どおりに、音楽を通して人を愛し、行動を起こして希望に全身を委ねた。神谷先生はそこに、人間の真の「生きがい」を見たのだ。

コロナ禍で、人と人とが断絶され、偏見や差別が広がり、傷つく人がいる。だからこそ、「共に生きる社会」の構築がますます重要となっている。神谷先生が入所者から学び、愛したように、近藤さんら入所者から愛され、学び続ける私は、「共に生きる社会」を創る一人として、どんな人も自分から愛する人でありたい。いま、それが私の「生きがい」となった。

優秀賞

渋谷教育学園渋谷高等学校（東京都）１年
能勢 あすか さん
Asuka Nose

“Life is like a bicycle. To keep your balance, you must keep moving.”

- Albert Einstein

The reason for living is a difficult and delicate topic that takes great maturity to talk about. However, searching for it is something that everybody goes through, and I have found mine to be “the absolute existence of my future.” The quote by Albert Einstein shows how there is always going to be a future, as it says “keep moving” without any specific destination, and these words have been the fuel of my life, and my reason to be.

A few years ago, my best friend tried to end his life with his own hands. He was fortunately saved by a random man walking by, but I only heard about this after at least three months had passed. He had had family issues including aggressive siblings and alcoholic parents, and the teasing at school didn't help anything. The time he came crying to me, pleading for help was one of the first times I had seen a boy cry, and it left an unforgettably deep scar in my heart. His eyes were burning red, nearly completely covered with a cascade of tears. I couldn't do anything. However, the quote by Einstein got my friend back on his own feet - the unknown man had saved him by sharing those wise words.

As Mrs. Kamiya has mentioned, there are so many people - some even younger than me - who suffer surreal difficulties, whether it be financial, physical, or mental. Ever since I nearly lost my best friend, I have always promised myself that I will help people who have lost their hope to live, including myself. The hardest part about this is that some people cannot ask for help due to embarrassment or complexes. My solution here is to reconfirm the existence of my future. Even if I give up, keep going, or decide to take my own life, there is going to be a future where I'm either more miserable, happier, or drowning in regrets after my death. Then why not work towards a better future? Moreover, if I ever feel like there is too much on my plate, I can ask for help without any sense of embarrassment, because I know I am helping my future self. The undeniable existence of my future is what keeps me going.

“Life is like a bicycle. To keep your balance, you must keep moving, and everybody needs training wheels and a few pushes at first. If you stop moving, that's your destination. But if you keep moving, the limits are unbounded.”

優秀賞

青森県立青森高等学校（青森県）２年
鈴木 淳平 さん
Junpei Suzuki

「生きがい」とは何だろうか。私たちに「生きがい」を感じさせているものは何だろうか。自分自身に問いかけてみる。人の役に立った時、喜んでもらえた時、私は「生きがい」を感じる。それは他人からの評価の有無に関わらず、自分の行為が他人の利益、幸福につながったという一種の達成感をもたらす。そして、大げさであるかもしれないが、役に立てて良かったという喜びも感じる。

「生きがい」とはこうした人々の繋がりの中で自分の存在意義が確立されることではないだろうか。それができるのは仕事や学校で社会的な「役割」を果たす時だけではないように思う。

今日の新型コロナウイルスの流行により、他人と直接的に対面して繋がる機会は激減した。実際、私自身も休校や部活動の活動停止により、人と接し、公的な「役割」を担う機会が明らかに減少したと感じている。そこで、このような時だからこそ、もっと「小さな役割」に目を向けるべきだと思う。例えば、家族で家の大掃除をするとか、地域のボランティア活動に参加するとか、家庭や地域といった小さなコミュニティ、小さな人々の繋がりの中で、「役割」を担うことである。勿論、「役割」の規模が大きいほど、その役割を完遂した時の達成感はより大きなものとなるだろうし、充実の度合いも増すだろう。

ただ、小さなコミュニティの中で得られる小さな喜び、役割達成感は決して価値のないものではなく、意義のあるものであると考える。そんなの「生きがい」なんて言えないと感じることもあるかもしれないが、このコロナ禍で世界が不安の渦に巻き込まれている今、少しでも前を向いて困難を乗り越えていかなくてはならない。コミュニティ、人と繋がる機会を少しでも作ることで、孤独や寂しさという負の感情のスパイラルから抜け出し、小さな喜び、達成感を得ることができると思う。

「生きがい」の概念は曖昧で明確な定義は定められない。人それぞれの「生きがい」があるだろう。そして、その「生きがい」を失いかけている人も大勢いると思う。いま私たちができるのは新型コロナウイルスが終息する日を夢見て、身近なところにある日々の小さな幸せ、小さな喜びに目を向けることである。きっと、このような状況だからこそ気づくことができる幸せがあるに違いない。この現状を一瞬で変える魔法のようなものは存在しない。だからこそ小さな幸せを「生きがい」に前向きに生きていきたい。

改めて自問自答する。「生きがい」とは何か。それは、人々の繋がりの中で自分の存在意義が確立され、達成感や喜び、幸せを感じることだと思う。

優秀賞

Lincoln Park High School（Chicago）3 年
山田 こゆき さん
Koyuki Yamada

Having “ikigai” is an indispensable part of life. “Ikigai” can be expressed in various ways, such as a reason for living, meaning of life, purpose in life, hope for a better life, and joie de vivre.

I have had six surgeries due to my ear diseases since I was little. The ward where I was hospitalized had many patients born with craniofacial deformities and was like the epitome of “The Existence of a Man Placed in a Limit-situation,” as described by Dr. Mieko Kamiya. The day before my surgery, I was playing with a girl, and her mother came and kept thanking me for being nice to her daughter, holding my hands firmly, and crying. I did not quite understand why she was doing it to me at the time; however, she later visited my room and explained her tears. Her daughter suffered from orbital hyperplasia, a severe deformity causing her appearance to be quite different from normal children; therefore, she spent her whole life avoiding the public eye. Some of her relatives and neighbors called her a monster; furthermore, her father disappeared. Her story touched me and is unforgettable. Her mother said, “No matter what happens, my daughter is my ‘ikigai,’ and I will live for her.” I was so shocked by her words that the pain of my illness blew away, and I began pondering what I could do to help.

Another woman had severe orbital hypertelorism, causing her eyes to be positioned abnormally. After a twelve-hour surgery involving craniotomy, the dramatic improvement in her appearance gave her self-confidence. She became remarkably sociable and even got a job for the first time in her thirty years of life. She said, “I found 'ikigai.' I feel like seeing the light in a long dark tunnel.” I prayed the light would lead her to find her way out to a new world, and, at the same time, I was impressed with the surgeon's expertise in helping her find “ikigai.”

These experiences helped me realize what “ikigai” is and how important it is to have one in life. We can find it after going through struggles, and it brings us the strength to live. I think Dr. Kamiya not only pursued her ultimate mission as a physician by being close to leprosy patients and devoting herself wholeheartedly but also contributed to patients finding “ikigai.” She is one of the people I respect the most and she greatly influenced my decision to pursue a career in medicine as a Japanese woman. I want to fulfill my mission to contribute to society with “ikigai” in mind by helping people as Dr. Kamiya did.

2021年度 第21回
高校生エッセー・コンテスト

「生きがい」とは？

逆境を光につないだ神谷美恵子の言葉から

津田塾大学は、津田梅子の「女子英学塾」創設から120年にわたり、「変革を担う」女性たちを輩出してきました。精神科医として、ハンセン病の逆境にある人たちに寄り添い続けた神谷美恵子（1914−1979）もその一人です。著書『生きがいについて』（みすず書房）は、出版から半世紀以上たった今も人々の心をとらえ続け、コロナ禍で再びその意義が見直されています。

今回のエッセー・コンテストでは、神谷美恵子が残した言葉を手がかりに、高校生のみなさんに「生きがい」について考えたことをエッセーという形で書いていただきます。

募集要項

【募集内容】
裏面の文章を読んで、「生きがい」についてあなたが考えたことをエッセーにしてください。英語の場合は400words程度、日本語の場合は1,200字程度で記述してください。

【応募資格】
高校生（国籍・学年・性別・居住地は問いません）。

【応募方法】
所定のGoogleフォームにエッセーを記載して応募してください。（郵送・持ち込み不可）。

Googleフォーム
https://qr.paps.jp/HSLpz

※Googleフォームは下書き保存ができません。Wordファイル等に下書きを作成してから所定のGoogleフォームにコピー・アンド・ペーストしてください。

【募集期間】
2021年8月2日（月）~9月6日（月）9:00受付締め切り

【表　彰】
最優秀賞1名（賞状及び副賞5万円を贈呈）
優秀賞若干名（賞状及び副賞1万円を贈呈）
最優秀作品は、10月10日（日）津田塾大学において表彰し、津田塾大学広報誌『Tsuda Today』と津田塾大学ウェブサイトに掲載・公表します。優秀作品は津田塾大学ウェブサイトに掲載・公表します。また、入賞者には10月8日（金）までに本人に通知します。なお、応募作品の著作権はすべて津田塾大学に帰属します。新型コロナウイルス感染拡大状況に鑑み、表彰をオンラインで実施する場合もあります。

【問合わせ】
津田塾大学ライティングセンター　高校生エッセー・コンテスト事務局
TEL：042-342-5129　E-mail：essaycon@tsuda.ac.jp
https://www.tsuda.ac.jp/aboutus/essay/index.html

個人情報は、本コンテストの目的以外には使用いたしません。
https://www.tsuda.ac.jp/privacypolicy.html

津田塾大学
TSUDA UNIVERSITY

Tsuda Vision 2030 − 変革を担う、女性であること −
弱さを、気づきに。強さを、分かち合う力に。不安を、勇気に。逆境を、創造を灯す光に。
https://www.tsuda.ac.jp/

津田塾大学ウェブサイトで、第1回～20回の高校生エッセー・コンテストリーフレット等を掲載しています。

応募者在籍校一覧 （2021 年度）

都道府県	公　私	学　校　名
北　海　道	私　立	遺愛女子高等学校
	私　立	札幌光星高等学校
青　森　県	県　立	青森高等学校
秋　田　県	県　立	能代高等学校
福　島　県	県　立	ふたば未来学園高等学校
	私　立	桜の聖母学院高等学校
群　馬　県	県　立	中央中等教育学校
埼　玉　県	国　立	筑波大学附属坂戸高等学校
	県　立	坂戸高等学校
	私　立	淑徳与野高等学校
千　葉　県	県　立	柏中央高等学校
	私　立	千葉日本大学第一高等学校
	私　立	流通経済大学付属柏高等学校
東　京　都	国　立	筑波大学附属駒場高等学校
	都　立	国際高等学校
	私　立	江戸川女子高等学校
	私　立	大妻中野高等学校
	私　立	関東国際高等学校
	私　立	学習院女子高等科
	私　立	吉祥女子高等学校
	私　立	恵泉女学園高等学校
	私　立	國學院高等学校
	私　立	品川翔英高等学校
	私　立	渋谷教育学園渋谷高等学校
	私　立	白梅学園高等学校
	私　立	白梅学園清修中高一貫部
	私　立	白百合学園高等学校
	私　立	女子学院高等学校
	私　立	成蹊高等学校
	私　立	玉川聖学院高等部
	私　立	多摩大学附属聖ヶ丘高等学校
	私　立	田園調布雙葉高等学校
	私　立	東洋英和女学院高等部
	私　立	広尾学園高等学校
	私　立	富士見丘高等学校
	私　立	三輪田学園高等学校
	私　立	明治学院東村山高等学校
	私　立	明治大学付属明治高等学校
	私　立	目白研心高等学校
	私　立	ケイ・インターナショナルスクール東京
神　奈　川　県	市　立	横浜商業高等学校
	私　立	相模女子大学高等部
	私　立	捜真女学校高等学部
	私　立	横浜雙葉高等学校

都道府県	公　私	学　校　名
山　梨　県	県　立 県　立 私　立	甲府西高等学校 甲府東高等学校 山梨英和高等学校
岐　阜　県	私　立	聖マリア女学院高等学校
静　岡　県	市　立	清水桜が丘高等学校
愛　知　県	県　立 県　立 私　立	一宮高等学校 菊里高等学校 聖霊高等学校
京　都　府	府　立 私　立 私　立	洛東高等学校 京都女子高等学校 同志社高等学校
大　阪　府	国　立 府　立 私　立	大阪教育大学附属高等学校池田校舎 箕面高等学校 城南学園高等学校
兵　庫　県	国　立 私　立 私　立	神戸大学附属中等教育学校 啓明学院高等学校 神戸龍谷高等学校
奈　良　県	私　立	西大和学園高等学校
広　島　県	私　立	盈進高等学校
福　岡　県	県　立 私　立 私　立 私　立 私　立	城南高等学校 西南学院高等学校 筑紫女学園高等学校 福岡雙葉高等学校 明光学園高等学校
沖　縄　県	私　立	N 高等学校
アメリカ合衆国	公　立	Lincoln Park High School
ニュージーランド	公　立	Thames High School
ベ　ト　ナ　ム	私　立	Australian International School in Vietnam
香　　港	私　立	Li Po Chun United World College of Hong Kong

10830374
株式会社栄美通信は、広告代理業として各事業（進学情報事業・企業広報事業・教育広報イベント事業・企業広報イベント事業・進学情報誌出版事業等）の個人情報を適正に取り扱い、個人情報の保護を徹底することが社会的責務であると認識し、「個人情報保護方針」を制定してお客様に安心して弊社のサービスをご利用いただけるよう、全従業員がこの方針に従って個人情報保護に対する取組みを実施しております。個人情報についてのお問い合わせは【お客様相談窓口】TEL 03−3561−0471〔平日10:00 ～ 17:00（12:00 ～ 13:00と土日祝日を除く）〕

高校生エッセー・コンテスト

Since 2000

メッセージ

第１回受賞者　荊尾 遥 さん

津田塾大学への受験を考えていた高校3年生の夏休み、私は夏期講習の合間を縫って、広島の市民団体が主催した「インド・パキスタン青少年と平和交流をすすめる会」に参加していました。後に大学での研究の方向性を決定づけることになったその時の体験を、第1回津田塾大学高校生エッセー・コンテスト（テーマは『21世紀へ乗り出す私の「航海」』）に津田梅子への手紙としてまとめ、応募しました。募集要項に掲載されていた津田梅子が1913年の卒業生へ向けて行ったスピーチは、当時高校生の私にもその意義は伝わってきましたが、その後、津田塾大学大学院在学中にニューヨーク国連本部でインターンシップを行った際や、仕事でインドに駐在した折など、現地で親しくなった友人たちに紹介したものです。ある友人からは、「自分が与えられた機会を活かして誰かをinspire（鼓舞）すること、それをあなたの場合、平和への情熱として伝えている」という感想が返ってきました。津田梅子の卒業生に向けたメッセージはまさに時代を超えた普遍的なものであり、私も自身を振り返る時など、折に触れて何度も読んできました。

第21回の今年は、在学中、津田塾祭に携わることによって知った神谷美恵子の言葉、『生きがいとは』がテーマだと知り、また当時を思い出しています。2003年はイラク戦争がはじまり、不穏な空気が漂っていましたが、現在もコロナ禍で様々な制約を受ける中、神谷美恵子の言葉は改めて心にしみます。募集要項にも引用されている精神医学の英語論文中の“limit-situation”（限界状況）についての論考に関しても、私たちは今だからこそ、共感できるのではないでしょうか。今回のエッセー・コンテストの作品を楽しみにしています。

第２回受賞者　辻内 千織 さん

「キング牧師に手紙を書こう」というテーマで高校生向けのエッセー・コンテストがあると聞いたのは、アメリカ史の研究者でキング牧師についての共著もある父が急逝した翌年のことでした。父親の仕事について大して知りもしなかった高校生の私にとって、キング牧師へ手紙を書くことは、今ふり返ってみれば、父の思想に触れ父に宛てて手紙を書くことに近かったのかもしれません。

ひとりの人間のいのちを超え、国境も世代も超えて大切な思いは受け継がれていくのだということを、その手紙を書くなかで深く実感しました。それはなんと心強いことだったでしょう。歴史やひとびとの営みの片鱗に触れ、その大きな流れのなかで自分にも果たすべき役割があるのだと背中を押してもらったように感じました。高校生エッセー・コンテストをきっかけに、立ち止まって考える、静かなひと時を得られたことに感謝しています。

ひとつひとつの闘いを経て社会は差別や偏見を克服し世界はより良くなる、と当時は考えていましたが、残念ながら今も分断はあらゆる場所に存在します。それでもなおそれらに対峙していこうと思えるのは、自分ひとりのものではない、受け継がれた思いが私のなかに息づいているからなのだと思います。

荊尾 遥　Haruka Katarao
国際機関 日本アセアンセンター コンサルタント

2001年、広島女学院高校卒業。2005年、津田塾大学学芸学部国際関係学科を卒業し、2007年、同大学院国際関係学研究科修了。在オランダ日本大使館化学兵器禁止機関担当専門調査員、国連アジア太平洋平和軍縮センター政務官、広島県平和推進プロジェクトチームアドバイザーなどを務め、2017年より国連軍縮部大量破壊兵器室勤務。核兵器不拡散条約(NPT)準備委員会を担当し、同年の核兵器禁止条約交渉会議ではNGOの窓口となり、条約の成立に立ち会った。2018年より国際協力機構（JICA）専門家としてインド工科大学ハイデラバード校で、低炭素社会をめざす日印共同研究プロジェクトにかかわる。2021年5月より現職。海洋プラスチックに関する教育プロジェクトを担当している。

辻内 千織　Chiori Tsujiuchi
株式会社 岩波書店　営業部

2002年、都立武蔵高等学校卒業、津田塾大学学芸学部英文学科入学。2006年、津田塾大学卒業、万田商事株式会社（オリオン書房）入社。
店頭での商品管理・販売業務などに携わり、文芸書・芸術書・洋書などを担当。海外文学やヤングアダルト文学を紹介するフェアや、水俣病やLGBTと社会について知るためのフェアなど、社会情勢や自身の関心にもとづいた企画を立案・実行。著名な作者や翻訳者を招いてトークイベントを開催したり、地元のメディアや出版社のPR誌などで本を紹介したりする機会にも恵まれた。2015年に株式会社岩波書店に入社し、現在に至る。営業部で書籍の販売・プロモーションにかかわる業務を担っている。

高校生エッセー・コンテストは、津田塾大学創立 100 周年を記念して、2000 年から始まりました。日本語、英語、どちらでも応募できるのが特色です。これまで、ある人物に手紙を書くという形式でしたが、2021 年は神谷美恵子が残した言葉を手がかりに、「生きがい」について考え、書く形式にしました。第 1 回から 21 回までの応募総数は 8709 編。海外からも作品が寄せられています。津田塾大学が「書く力」を重視するのは、津田梅子が本学の前身「女子英学塾」を創設した頃からの伝統です。テーマを深く掘り下げ、自分の言葉で的確に表現することは、考える力、生きる力にもつながります。津田塾大学は高校生のみなさんの「書く力」を応援しています。

神谷美恵子展から得たもの

2003年神谷美恵子展企画者　北村 友紀子 さん

2003年秋の大学祭で、学生たちの自主企画として「神谷美恵子展」を開催しました。神谷先生の書物や愛用品を展示し、加賀乙彦先生や柳田邦男先生をお招きして、神谷美恵子先生のお仕事についての講演を開催、またハンセン病の詩人塔和子さんを追うドキュメンタリー映画「風の舞」の上映なども行いました。学生の有志の輪が広がり、多くの人がつながり、先生の生き方や考え方について学び考える機会となりました。「生きがい」もその時に出会った言葉で、20年近くたった今もその意味を探している途上です。

今まで「神谷美恵子展」で得たものが、心の中で小さな光る石のように輝く瞬間がいくつかありました。精神科医としての神谷先生が病跡研究の観点から焦点を当てられたヴァージニア・ウルフのご夫君とのやりとり、またご自身が訳されたジブランの詩の、結婚や子育て、別れのメッセージ、あるいはまた長島愛生園を訪ねた時の海や風の匂いの記憶など、のこしてくださった言葉の数々は年を重ねて違う意味合いを帯びてくることもあれば、その時にはわからなかったことが不意にわかることもありました。

私は最近の人生の節目として出産を経験しました。今まですべて自分のものだった私自身の時間を、否が応でも子のために使わなければならない初めての日々です。その中で、神谷先生が子育てをしながら、働き続け、研究し続け、そして「生きがい」と言い切る療養所での仕事にたどり着いた重さについて考えています。10代でハンセン病患者の方とはじめて接したときの衝撃の記憶は、長い年月を経ておそらく純粋な思いだけでは解決できない様々な人間性の問題を抱えていったのでしょうが、それでも、決してそれを手放さなかった。そして、夢に向かって真っすぐ最速で、というよりは、家庭を持ち、研究をし、働き、という一見大きく迂回するような道を懸命に歩いて、そっと自分の内に準備を進めていった。そこに強い意志を感じます。

私も「生きがい」について若い熱い思いを心の奥に残し、人生の折り返し地点を過ぎたこれからも探していきます。それは神谷先生からの問いかけです。

北村 友紀子　Yukiko Kitamura
2004年 英文学科 卒業

高校生エッセー・コンテストに寄せて

津田塾大学学長　髙橋裕子

本学が100周年を迎える際に始まった本エッセー・コンテストに、私自身も長く関わり、幾度も審査委員長を務めて参りました。その年度にふさわしい題材を選ぶことは簡単なことではありませんでしたが、高大連携として高校生から寄せられる力強いメッセージが励ましとなり、20年間継続してこられました。昨年度コロナ禍で延期になった本コンテストですが、このような困難な時代にあってこそ、今年の題材としてぜひ実現したいと願っておりました神谷美恵子を取り上げることが叶いました。

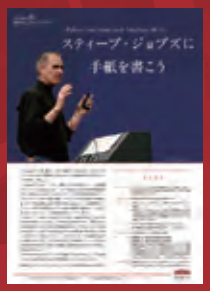
本コンテストが未来への希望につながることを祈っております。

言葉と出会う喜びに

ライティングセンター長　早川敦子

魂がこもる文章と出会い、深く考えて、そこから自分自身との対話が始まります。そんな経験を、エッセー・コンテストで表現してくれた高校生たち。コンテスト20年の歩みは、書くこと・考えることを通して生まれてきた、言葉と出会う喜びの蓄積でもあるでしょう。過去の入賞者に加え、今回のテーマにもなった「神谷美恵子」展を大学祭で企画した卒業生からのメッセージも届きました。たくさんの出会いがこれからも広がっていきますように。

高校生エッセー・コンテスト 20年の歩み



スティーブ・ジョブズ
第 18 回　2017 年度

ローザ・パークス
第 14 回　2013 年度

エマ・ワトソン
第 17 回　2016 年度

キング牧師
第 2 回　2001 年度

ネルソン・マンデラ
第 19 回　2018 年度

マズーン・メレハン
第 20 回　2019 年度

ジョン・レノン
第 3 回　2002 年度

デイヴィッド・ソロー
第 5 回　2004 年度

チャールズ・チャップリン
第 7 回　2006 年度

レイチェル・カーソン
第 4 回　2003 年度

サン＝テグジュペリ
第 8 回　2007 年度

津田梅子
第 11 回　2010 年度

津田梅子
第 12 回　2011 年度

オードリー・ヘップバーン
第 6 回　2005 年度

津田梅子
第 15 回　2014 年度

100 人の村（村人）
第 10 回　2009 年度

アル・ゴア
第 9 回　2008 年度

ヴァイツゼッカー
第 16 回　2015 年度

津田梅子
第 13 回　2012 年度

津田梅子
第 1 回　2000 年度

https://www.tsuda.ac.jp